

## ニューオーリンズ（8月8日～8月14日）

- 8月8日(日) ニューオーリンズ到着、オリエンテーション
- 8月9日(月) 分科会フィールドトリップ
- 8月10日(火) Habitat For Humanity でのボランティア、スペシャルトピック
- 8月11日(水) World War II museum 見学、WWII についてのスペシャルトピック
- 8月12日(木) BP 社メキシコ湾原油流出事故についてのスペシャルトピック  
ニューオーリンズ・フォーラム
- 8月13日(金) タレントショー、フレンチクォーター地区見学、  
ジャズコンサート鑑賞
- 8月14日(土) サンフランシスコに出発  
※宿泊場所：India House Hostel

### ■サイトテーマ

#### カトリーナからの再出発

#### ～歴史、人種を超えた協働～

19世紀フランス植民地時代の街並みを残すフレンチクォーター地区やジャズミュージックで有名なニューオーリンズ。「アメリカの中のヨーロッパ」とも言われ異国情緒漂うこの地は、かつては全米最大の奴隷市場として栄え、人種間差別や対立が絶えない場所でもあった。そのニューオーリンズに2005年8月、ハリケーン・カトリーナが上陸し、人口の半数を占めるアフリカ系アメリカ人居住地区を中心に甚大な被害を与えた。しかし、その復興への願いは人種、地域、さらには国を超えた協力を生み出し、町は今生まれ変わりつつある。第3サイトでは、復興の途上にあるこの地で地域住民との対話や交流を重ね、大災害の現実と歴史や人種を超えた協働の理解を目指す。

### ■活動の指針と目標

- ・ハリケーン・カトリーナと復興活動への理解
- ・「米国が捉えた第二次世界大戦」を学ぶ
- ・文化体験

### ■具体的活動

- ・Habitat For Humanity でのボランティア

- ・World War II Museum 見学、WW II についてのスペシャルトピック
- ・BP 社メキシコ湾原油流出事故についてのスペシャルトピック
- ・ニューオーリンズ・フォーラム
- ・フレンチクォーター地区見学、ジャズコンサート鑑賞

### 8月8日(日)

#### ニューオーリンズ到着、オリエンテーション

前サイトのワシントンD.C.では最後の2日間にホームステイを行ったため、この日は空港にて集合後、ホストファミリーとお別れをしてから、2日ぶりに会う参加者同士で再会のハグを交わし、飛行機に乗り込む慌ただしい移動となった。有名なニューオーリンズ出身のジャズ奏者の名を冠したルイ・アームストロング国際空港から、整備されていないガタガタの道に揺られてバスが着いた先は、バックパッカーも利用する現地のユースホステル。先に到着した日本側参加者の中には、ワシントンD.C.の整然とした街並みとの差に驚く者や、移動の疲れと現地特有の蒸し暑さに体調を崩す者も居り、日米学生会議が初めて南部にやってきたのだということを改めて実感することとなった。

### 第3章 本会議・サイト活動

夜の全体オリエンテーションでは、サイトコーディネーターより脱水症への処置や体調管理に関する注意喚起、治安や外出時間についての注意などが他のサイトよりもかなり入念に行われた。

#### 8月9日(月)

##### 分科会フィールドトリップ

ニューオーリンズでの活動日初日。ホームステイと移動日を挟んだため、約3日ぶりに公式のRTタイムが設けられた。久しぶりの議論の場であり、ちょうど会議の折り返し地点でもあることから、多くの分科会が、今後の方針やファイナル・フォーラムでの発表内容について意見交換を行っていた。しかし、今までの疲れが溜まり、蒸し暑い気候にも慣れない中で、また前2サイトの快適な寮とは打って変わって空調もままならないユースホテルでなんとか場所を見つけて議論を行う必要があり、疲労や苛立ちで集中し辛い環境になってしまっていた。朝から午後にかけて長時間のRTタイムを設けたため、フィールドトリップを行う分科会や、気分転換に全員で街を見学する分科会もあり、残された時間も半分となった分科会活動を充実させようとの分科会も苦心していた。

午後はフリータイムとし、多くの参加者がフレンチクォーター地区に観光に繰り出していた。第3サイトともなると、日本側、米国側といったまとまりは薄れ、日米の参加者が自然に集まり、皆で有名なCafe Du Mondeのドーナツや、街の至る所で演奏されているジャズの音色や、バーボン・ストリートの喧騒を楽しんでいる様子であった。

#### 8月10日(火)

##### Habitat For Humanityでのボランティア、スペシャルトピック

NPO団体であるHabitat For Humanityは、カトリーナ被災地において、被害を受けた住宅を建て直し、市民に提供するという活動を行っている。その活動は世界100カ国で行われ、ボランティアとして日本からも多くの学生が参加している。私達はそのボランティアのため、朝早くバスに乗り

込み、活動場所に向かった。到着後は、職員の方からオリエンテーションを受け、2グループに分かれての作業となった。朝8時から夕方16時までの8時間もの間、炎天下で実際の建築に携わり、木材運びやペンキ塗りなどを行った。最初こそ仕事に慣れなかったが、作業の中でお互いが協力し合い、後半になると皆率先して、ボランティアに参加した。その後はホテルに向かい、夕食を食べた後、スペシャルトピックを行った。



写真：Habitat For Humanityでのボランティア

#### 8月11日(水)

##### World War II museum 見学、WW II についてのスペシャルトピック

この日はThe National World War II Museumを訪れた。この博物館は第二次世界大戦に対するアメリカの貢献を記念して、ノルマンディー上陸作戦から56周年であった2000年の6月6日に、ヨーロッパや太平洋諸国への上陸用舟艇が作られていた地であったニューオーリンズに開かれたものである。ボランティアガイドの方に簡単な説明をして頂いた後、自由に館内を見学して回った。大戦で使用されたモデルの軍用機や大戦当時の米国で

発行された風刺画、米兵の証言ビデオなどの展示物とそれらの展示方法から、日本側参加者は米国が捉える第二次世界大戦の一端を学ぶことが出来たのではないかと思う。

また、見学後は館内のホールで参加者全員が博物館の感想や展示に対する意見を交換するとともに、WW IIに関するスペシャルトピックの時間を設け、「戦争とメディア」「戦時中の従軍女性」などのテーマについても議論をした。日米両国の学生が、過去に起きた日米間での戦争について互いの認識の違いに触れ、現在、ひいては将来における日米関係に関しても考える大変貴重な機会となった。

### 8月12日(木)

#### BP社メキシコ湾原油流出事故についてのスペシャルトピック、ニューオーリンズ・フォーラム

午前中はホテルにて、日本でもニュースに取り上げられ、ニューオーリンズも被害を受けていたBP社のメキシコ湾原油流出事故について小グループに分かれて意見交換を行い、午後のフォーラムへの準備とした。午後は Tulane University に移動し、“Recovery from Natural and Man-made Disasters: Lessons Learned” をテーマとしたフォーラムを行った。

講演者と講演の表題は以下の通りである。

- ・“The Offshore Energy Industry- Challenges and Opportunities”  
- Mr. J. Keith Couvillion (Chevron U.S.A. Inc.)
- ・“Habitat for Humanity and Rebuilding New Orleans”  
- Mr. Jim Pate (New Orleans Area Habitat for Humanity)
- ・“Louisiana's Trilogly of Human Caused Disasters:coastal wetland loss, Katrina flooding, and the BP oil gusher.”  
- Dr. Robert Thomas (Loyola University)
- ・“Inside the New Orleans Recovery: Experiences Gained, Lessons Learned, People Touched”  
- Mr.Travis Henry (Formerly of Recovery

Department of the City of New Orleans)

これまでのニューオーリンズでの滞在中に、実際に Habitat for Humanity で復興支援ボランティアを体験したり、地域に住む人々の層や家の様子を見たり、5年前の災害の爪跡が残る街の雰囲気を感じていたことなどから、参加者全員が熱心に講演に耳を傾け、自分達が体験した活動や街の印象に基づく質問も活発に投げ掛けられた。講演者の4氏は地域の産業、NPO、研究、行政の各分野を代表して講演をしてくださったので、サイト活動全体を貫く地域復興というテーマについて、より多角的に学び考える機会とすることが出来たのではないかと思う。フォーラム後のレセプションでも、講演者を囲んで熱心に質問をする参加者の姿が見られ、その後のリフレクションでは、いつも話される会議への感想や今後の抱負のみならず、ニューオーリンズという土地に対する意見や感想も次々と共有されたことが印象的であった。



写真：ニューオーリンズフォーラム

### 8月13日(金)

#### タレントショー、フレンチクォーター地区見学、ジャズコンサート鑑賞

午前中は分科会に分かれて議論し、午後は自由

### 第3章 本会議・サイト活動

に街を散策した。このサイトの滞在最終日ということで、French Quarterで観光したり、ショッピングをしたりなど思い思いにフリータイムを満喫していた。夕方からは、2度目となるタレントショーを参加者が主体となり、開催した。自慢の歌を日米学生がチームとなり披露するもの、ダンスを華麗に踊るものなど様々な個性が発揮され、会場は常に歓声と笑いに包まれていた。

#### ■成果と考察

##### ・ハリケーン・カトリーナと復興活動への理解

未だ爪痕が大きく残る地域に直接赴き、NPO団体Habitat For Humanityと共に参加者が7時間にも及ぶ家屋復旧へのボランティアを行った。またLoyola大学教授を始め、ニューオーリンズ市行政の方を含めた4名の講演者の方々からハリケーン・カトリーナがどのような被害をもたらし、社会的、経済的に影響をもたらしたのかということを中心にニューオーリンズ・フォーラムを開催した。これらの活動を通して、未だ残るカトリーナの傷跡を改めて知るとともに、その復興へ向けて日々尽力している多くの人々との対話の中で、将来を担う日米両国の学生がこのような地域復興に対して何をすべきなのかを深く考察するきっかけにもなった。

##### ・「米国が捉えた第二次世界大戦」を学ぶ

ノルマンディー上陸の日にオープンしたことからD-Day Museumとも呼ばれ、第二次世界大戦の勝利に対するアメリカの貢献を記念して建てられたNational WWII Museumを訪れた。大戦で使用されたモデルの軍用機や大戦当時の米国で発行された風刺画、米兵の証言ビデオなどの展示物とそれらの展示方法から、日本側参加者は米国が捉える第二次世界大戦について学ぶことができた。

また館内では、日米の学生が博物館見学の感想や展示に対する意見などを交換するとともに、WWⅡに関連したスペシャルトピックを設け、「戦争とメディア」「戦時中の従軍女性」などのテー

マについても議論をした。日米両国の学生が、過去に起きた日米間での戦争について互いの認識の違いに触れ、現在、ひいては将来における日米関係に関しても考える大変貴重な機会となった。

##### ・文化体験

19世紀のスペイン・フランス植民地時代の建築物が残るフレンチクォーター地区を訪問し、「アメリカの中のヨーロッパ」とも言われる異国情緒あふれる街並みを見学した。また、この地で生まれたジャズミュージックについて、ホテルでのコンサート鑑賞や街中での地元の人達の演奏を楽しむなど、様々な歴史や人種が混在するニューオーリンズの文化を体感することができた。

ハリケーン・カトリーナの被害や格差問題など様々な課題を抱えながらも、被災後も地元での生活を選んだという人々の地域への強い愛着の理由の一端を学ぶことができ、日本側学生のみならず米国側の学生にとっても米国の新たな一面に触れる体験となった。

#### ■サイトコーディネーター後記

##### 【高橋 央樹】

ニューオーリンズは、スペインやフランスなどに植民地化されていた経緯もあるため、ふと立ち入るとここはアメリカなのかと疑ってしまうほど異国情緒溢れた煌びやかな街並みである。ただ実際に中心都市を離れてみると、華やかな街の姿はなく、カトリーナ被害の傷跡が残る住宅街が現れる。そこには活気はなく、夜になると危険なのか出歩く人を見かけることはなかった。

サイトコーディネートをする際は、カトリーナからの被害の現状やそれらからの復興に注力したプログラム作りに励んだ。実際NaokiやMarieの努力があって、Habitat For Humanityでのボランティアや、ニューオーリンズ・フォーラムを開催することもできた。フォーラムでは、カトリーナ復興に携わった多くの方々の講演を通して、カトリーナが何をニューオーリンズにもたらしたのかという点に焦点を当てつつ、大災害への理解を深

めることができた。しかし5日間という4サイト中一番短い中で、地元住民との交流の場をプログラムとして組み込むことができなかった。マクロとしてのカトリナへの理解を達成できた一方で、よりミクロな視点からカトリナへの洞察を高めることができなかったのが、コーディネーターとしての後悔である。

また私達がニューオーリンズサイトをコーディネート又は、運営する際に一番気を付けていたのは体調管理であった。実際に30度以上の気温と汗ばむ湿気によって、体調を崩す参加者は多かった。ただ深刻な体調悪化を訴える者がいなかったことは、ファイナルフォーラムが近づいていたこともあり、私達サイトコーディネーターをほっとさせた。サイトコーディネーター同士が協力し合い、体長管理に対しての配慮を常に促すように参加者に伝えていたことがこのような結果に繋がっていたらう。

1年間にわたるサイトコーディネーターとしての活動だが、事実上仕事を多数行っていたのは、アメリカ側実行委員であるNaokiやMarieであった。私達自身円滑なサイト運営が行えたのも、彼らの準備が万全であったからである。最後となりますが、サイト運営に協力して頂いた方々とともに、アメリカ側実行委員の二人にもお礼を言いたい。本当にありがとうございました。

【中村 真理】

約1年前、担当サイトを相談するECメールでNew Orleansを希望した背景には、New Orleansに特有の、歴史、人種、文化の融合への興味があった。スペイン・フランス植民地時代の建築物や通りのJazzの音色が観光客に人気である一方で、アフリカン・アメリカンが人口の半数を占め、ハリケーン・カトリナの際には住み分けの結果形成された貧困地域が大打撃を受けている。その「多様」な暮らしに少しでも多く触れてみたい、と思った。

実際に、サイトとしてのNew Orleansでの体験は、他のサイトと大きく異なるものであったよう

に思う。まず宿泊先が、前2サイトのような大学ではなく、多数のバックパッカーが泊まる地元のユースホテルであったこと。これはとりわけ日本側参加者にとって大変貴重な体験であると同時に、ファイナル・フォーラムが近づく中で分科会活動の場所を確保することが難しかったり、一般客の方々への配慮を問われたり、といった状況も引き起こした。次に、安全上の管理が特に問題となったこと。コーディネート期間中も、治安への懸念がAECの二人から伝えられており、毎回のアナウンスで、健康管理と外出時の注意を呼び掛けていた。最後に、家造りのボランティアやカトリナ被害をテーマにしたフォーラムを行うなど、地域そのものに目を向けたプログラムが多かったこと。その結果、このサイトでのリフレクションで唯一、会議の進め方などに加え、New Orleansという土地に対する意見や感想、批判などが次々と共有されていった。5日間の活動日の中で私達が体験したのは、New Orleansに存在する様々な視点の一部であり、この土地が抱える多様で複雑な問題のほんの一部であるが、参加者一人一人がNew Orleansを肌で感じ、考えを巡らせていたことがとても嬉しかった。

最後になりますが、New Orleansサイトでのプログラム実現にご協力いただいた皆様に、日本より感謝申し上げます。そして、現地に出向くなど充実したプログラム作りに1年間奔走してくれ、また日本側の希望も快く取り入れてくれたAECコーディネーターのNaokiとMarie、JECコーディネーターのひろきにも感謝しています。どうもありがとうございました。



写真：ニューオーリンズサイトコーディネーター  
(左から中村・Naoki・高橋・Marie)